# 白三平の四季

中村武志

昭和34年2月10日　第1刷発行

目白三平の四季

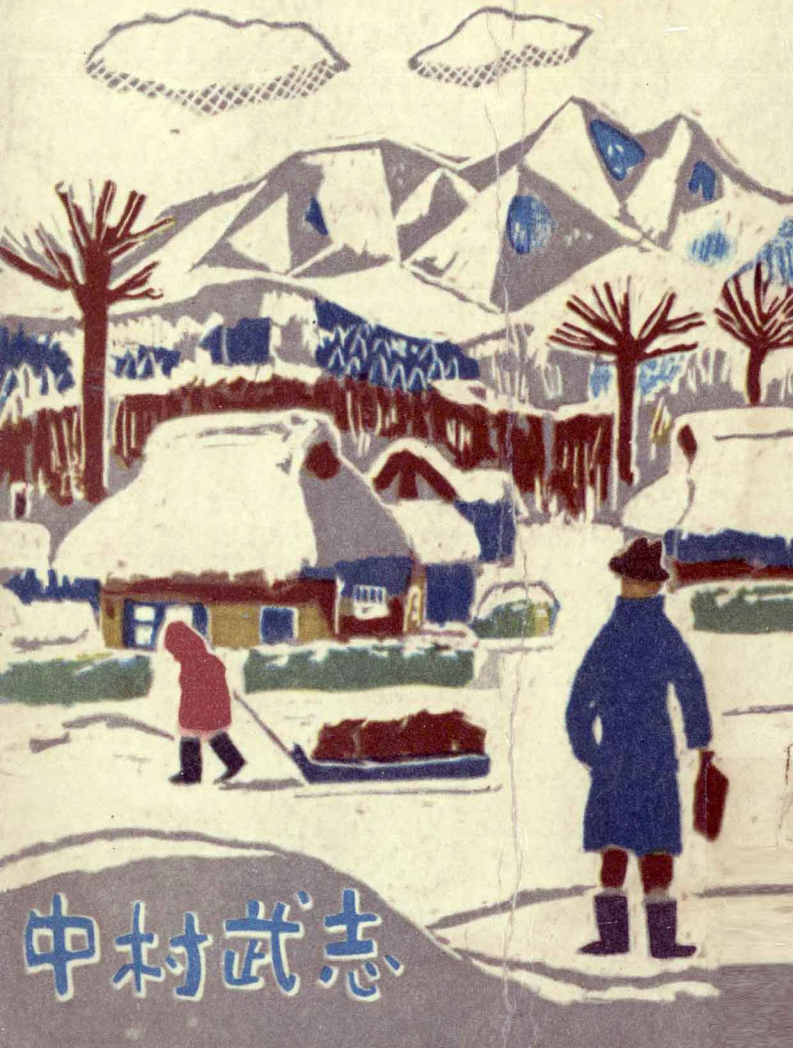
著者　中村武志
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(94)3101・3111・3121

¥ 150

© 中村武志　一九五九

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）　（黒柳製本）

# 白三平の四季



中村武志

ロマン・ブックス　¥150

昭和34年2月10日　第1刷発行

目白三平の四季

著者　中村武志
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(94)3101・3111・3121

¥ 150

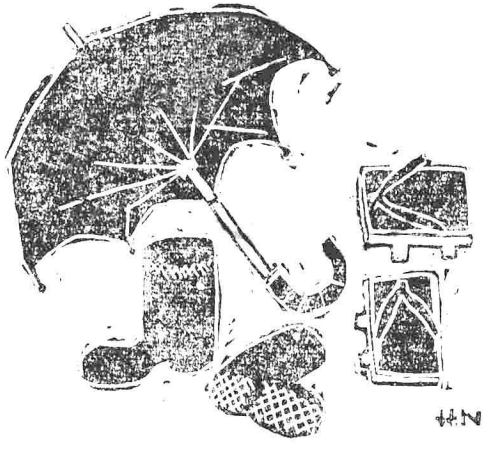
©中村武志　一九五九

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(黒柳製本)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# 目白三平の四季

中村武志



ロマン・ブックス

装幀　西原比呂志

目　次

目白三平の通勤……一〇
目白三平の小唄……二四
目白三平の靴……三九
目白三平のクリスマス……五三
目白三平の新年……六七
目白三平の塗料試験……八一
目白三平の幹事……一〇二
目白三平の植木……一三〇
目白三平のビフテキ……一四五
目白三平の電気洗濯機……一五九
目白三平の家出……一九四
あとがき……二三六

# 目白三平の四季

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# 目白三平の通勤

## 目白三平が小遣の追加を細君に要求すること

その日、国鉄職員の目白三平は、朝飯をすませると、すぐ食卓の前を離れた。起きてから二十五分しか経っていなかった。このように朝の仕度が手回しよく出来るのは、サラリーマン生活二十数年の訓練の結果であった。

目白三平は、上衣のポケットから煙草を取出すとマッチを擦り、そのまま玄関へ出て行った。後から細君のとし江さんが、

「今日は少しお寒いようですから、スプリングコートを着てお出でになったら？」

と言った。

目白三平は、とし江さんからスプリングコートを受取った瞬間、

〃財布の中がお寒いでしょうから、少しお小遣をお持ちになったら？　と言ってくれた方が俺はよっぽど嬉しいのだがね。そういうことも新婚の頃は二、三回あったようだが、それ以来一度もないようだな。女の魅力というものは、新婚当時のものを、いつまでも持ち続けるということなんだ。結婚生活二十年の現在、女房がこっそり財布の中へ小遣を追加しておいてくれたら、我々亭主族は涙をこぼすほど感激するにちがいないんだ。……そうだ。給料日までにまだ五日もあるが、ポケットには十円玉が三個しかないではないか。女房には済まないけれど、今朝はあの手を使って小遣をせしめるよりほかはな

いな〃
と、心の中で呟いた。
目白三平は、靴の紐を結びながら、
「おい、大急ぎで五百円くれないかな。今夜は課長の歓迎会があるんだよ」
と、とし江さんに言った。
〃あら、課長さんは、三、四ヵ月前にお変りになったばかりではございませんの？〃
という不審げな顔をして、とし江さんは目白三平の方を見た。
「もう時間がないんだよ。早くしてくれないかな」
と、目白三平はひけめを感じながら殊更難しい顔をして言った。
〃いつも出がけになって急に言い出すのはちょっとあやしいというべきだわ。私の方に考える余裕を与えずに、お金を出させる手段にちがいないわ。でも、万一本当だとしたら五百円は出さなければならないわ。課長さんの歓迎会に出席しないために、昇給がおくれたり、ボーナスが少かったりしたら、それこそ大変ですからね。春木は来年は高等学校ですし、冬木だってすぐに中学生になるんですからね。今日のところはだまって五百円を渡すことにしましょう〃
と、結局とし江さんは考えたのであった。

## 目白三平が電車の中で体を疲労させぬように努めること

特別に目白三平を弁護するのではないが、彼は始終こういう卑怯な手段を弄しているわけではなかった。一年のうちに三、四回、それもせっぱ詰った時に限られていた。
目白三平は、とし江さんから五百円を受取ると、慌てて玄関を飛び出した。山手線目白駅まで、彼の歩幅で普通に歩いて五分の距離なのだが、時間はもはや三分しかなかったからだ。大通りへ出ると、足早に歩いて行くサラリーマンたちの間を縫って、目白三平は相

変らず走り続けた。

目白三平が、プラットホームへ降りると、丁度目白駅発七時四十分の山手線外回り七二五電車が進入して来るところであった。彼の乗る電車は毎朝この七二五に決っていた。

今朝の七二五電車の運転士は、目白三平が親しくしている、若い友だちであった。目白三平は、やあ元気だねという風に手を振ったが、向うでは、ひたむきに前方を注視しながら、電車を所定の位置に停車させるために、全神経を使っていて、プラットホームの彼を認めることは出来なかった。

少年の日に夢みたる国鉄の運転士となりて今日も働く

朝早き乗務のわれを送り出す妻を愛しむみごもりしより

目白三平は、彼の作になるこの歌を口ずさみながら、先頭の電車の真中の入口からしゃにむに自分の体を割り込ませ、徐々に奥の方へはいって行って吊皮にぶら下がった。

ドアの近くに立っていると、駅へ着く度に、出入りの人たちに押されたり、突かれたりするのだ。それに抵抗していると、思いがけないほど疲労するからであった。

この疲労度を計るのに、R・M・Rというのがある。これは、歩いたり、走ったり、または何か仕事をした時のエネルギー消費量を、その同じ人が何もせずに寝ている時のエネルギー消費量で割ったものなのだ。

乗物に乗って一番楽なのは、もちろん腰かけている時だが、その場合のR・M・Rは、〇・二から〇・四なのだ。誰からも押されずに立っている時のR・M・Rは、〇・三乃至〇・五であり、吊皮にぶら下がっていると、R・M・Rは、〇・二乃至〇・四だから、腰かけている時と変りはない。

しかし、乗物が前後左右に大きく揺れると、R・M・Rは急に〇・五から一・〇になる。カーブにかかっ

て、全身の重量を吊皮で支える時には、一・八から二・五にもなるのだ。

それ故目白三平は、いつでも吊皮にぶら下がり、出来るだけ体に力を入れぬようにして、R・M・Rが〇・二乃至〇・四どまりになるように努力している。国鉄本社に出勤して、朝から疲労していては困るからだ。

## 楚呉国鉄総裁に向ってひそかに許しを乞うこと

電車が池袋に到着すると、目白三平の前の座席が一つ空いた。彼は素早く周囲を見回した。前後左右には、二十代、三十代の、若いサラリーマンばかりが立っていた。そこで目白三平は少し安心してその空席に腰をおろした。しかし次の瞬間、目白三平は、楚呉国鉄総裁の訓示を思い出したのであった。

一、混雑時ニハ、極力譲席ヲ励行スルコト。

二、喧噪ニワタリ他ノ旅客ノ迷惑トナルヨウナコトハ努メテ慎シムトトモニ、服装ハ端正ヲ旨トシ、非礼ニワタル行動ハ極力避ケルコト。

三、職員トシテノ誇ヲ持チ、一般旅客ノ模範トナルヨウ努メルコト。

この三ヵ条の訓示が、今度はバリトンの少ししゃがれ気味の楚呉総裁の声となって、東京駅前の国鉄本社の方角から、目白三平の耳朶を打って来るのであった。彼は思わず狼狽して、

〃総裁の御訓示に背いて誠に申訳ございませんが、只今のところ私の周囲には、病人も老人も、赤坊を抱いた婦人もいませんので、私がかけさせていただいた次第です。私はいつでも腰をおろす前に、必ず周囲を一わたり見回して、そういう人の有無をたしかめることにいたしております。また次の駅で病人や老人が乗車して来れば、率先して、席を譲る固い決意を抱いております。どうか四十六歳の更年期障害気味の私を大目に見てやって下さい〃

と、許しを乞うのであった。

目白三平の左隣りの席には、事務員らしい娘さんが、膝の上に雑誌をひろげて熱心に読み耽っていた。鉛筆で何かしるしをつけていた。目白三平が、何気なくそちらへ眼をやると、その娘さんは、「共稼ぎ夫婦の料理こんだて」というところを読んでいるのであった。目白三平が、隣りから盗み見た第一日のこんだては、

朝　御飯、みそ汁、たらこあえ、いわしみりん干。
昼　御飯、卵焼、豆甘煮、つくだ煮。
夕　御飯、すまし汁、魚みそ焼、ほうれんそう韓国あえ。

となっていた。

娘さんは、朝のこんだての中の「たらこあえ」を鉛筆でさっと消してしまった。それにつられて目白三平は、

〃そうです、そうです、いわしのみりん干がありますから、たらこあえはいりませんね。あなたは共稼ぎをなさっている御様子ですが、何といっても朝は大変でしょうね。お察しいたします。ところで、一日中つけものがありませんが、私ならば、信州のたくあんと書き添えるところですね〃

と、ひそかに呟いた。

目白三平の呟きが聞える筈はなかったが、その娘さんは彼の方をちらっと見てから、昼飯の豆甘煮を消し、夕飯のほうれんそう韓国あえをおひたしに訂正し、それから余白のところへ、主人当番と大きく書き込んだ。

目白三平は、娘さんからちらっと見られた時、再び楚呉総裁の訓示「非礼ニワタル行動ハ極力避ケルコト」を思い起した。隣りの人の雑誌を盗み見るのは、たしかに非礼にわたる行動であった。目白三平は姿勢を正してから眼をつぶった。

## 目白三平が電車の窓から赤革の鞄を渡すこと

目白三平は眼をつぶっていたが、眠ってしまったの

ではなかった。サラリーマンの自由について、思考をめぐらしていた。

〃我々サラリーマンは、ラッシュアワーの電車やバスに乗って、雨が降ろうが風が吹こうが、毎日同じ時間に出勤しなければならないのだ。こんな苦痛なことはないと思うのだが、よくよく考えて見ると、この通勤時間だけが、一日のうちで、わずかにサラリーマンを解放している自由な時間ともいうべきものではないか〃

と、目白三平は考えはじめていた。

〃家庭には親愛なる女房や可愛い子供たちがいて、何かと慰められることが多い。しかしその反面、家庭の束縛というものも大きいのだ。その束縛から逃がれるために、我々サラリーマンは、毎朝慌てて会社へ出かけて行く。ところが、いざ出勤すると、そこには家庭とは別の束縛が待ち構えていて、彼をがんじがらめにしばってしまう。夕方になると、家庭ではもっと自由であり自分を慰めてくれる唯一の場所だと思いはじめる。勤めを終るや否や、いそいそと家庭へ戻って行く。再び、家庭の束縛が待っている。結局サラリーマンというものは、両方の束縛から逃がれようとして、家庭と会社の間を往復しているわけだ。だから解放されているのは、わずかに通勤の途中だけなんだ〃

と、目白三平は考えたのだった。

この結論に達した時、七二五電車は上野駅に到着した。乗降が終って、ドアが閉まった時であった。目白三平の背後の窓ガラスが、とんとんと叩かれた。後を向くと、やはり事務員らしい娘さんが、真剣な顔をして何か言った。目白三平はすぐ窓を開けた。

「済みませんが、網棚の赤い鞄を取って下さいませんか」

と、その娘さんが、狼狽しながら言った。電車は動き出していた。目白三平は慌てて立ち上がると、網棚の赤い鞄を取り、電車についてプラットホームを走って来る娘さんに手渡した。娘さんは声は出さなかっ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton